

学校教育目標		確かな学力を身に付け、心豊かにたくましく、ともに学ぶ児童の育成 ～150年分の感謝を込めて！チーム・笑顔・挨拶～	
a ミッション	○ 小中連携教育を通じた主体性・協働性を育む教育の推進	a ビジョン	○ 「自ら学ぶ子」「ともに学ぶ子」を育てる学校 ○ 通ってよかった・通わせてよかったと実感できる安心・安全な学校 ○ 児童が憧れ頼れる教職員を育成する学校

尾道市立久保小学校

評価計画				自己評価				学校関係者評価			改善計画			
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値	イ			ロ	ハ			
確かな学力の育成	主体的に学ぶ力の育成	○算数科を中心に「ほめ」と「対話」のある授業を実践する。 ・主体的な態度をほめる。 ・児童同士の関わりのある場を設ける。	○学期末のテストと学期末実力テストにおいて、クラスの平均点を、目標値（学期末テスト：低学年90%・高学年80%以上、学期末実力テスト：低学年85%・高学年75%以上）にする。 ○標準学力調査（12月）において、クラスの平均点を全学年平均以上にする。 ○主体性に関するアンケートを、目標値以上（4段階評価の内、3以上の評価をした児童80%以上）	<学期末テスト> 1年生：90 2年生：90 3年生：90 4年生：80 5年生：80 6年生：80 学校合計 510 <実力テスト> 1年生：85 2年生：85 3年生：85 4年生：75 5年生：75 6年生：75 学校合計 480 <標準学力調査> 12月実施 1年生：78.2 2年生：73.1 3年生：69.9 4年生：64.8 5年生：58.3 6年生：73.8 学校合計 418.1 <主体性に関するアンケート> 4段階評価の内、3以上の評価をした児童80%以上	<学期末テスト> 1年生：88 2年生：94 3年生：92.5 4年生：85.5 5年生：76.3 6年生：90 学校合計 526.3 <実力テスト> 1年生：73.7 2年生：82.3 3年生：75.5 4年生：74.4 5年生：70.5 6年生：70.6 学校合計 456 <標準学力調査> 12月実施 1年生：81.6 2年生：74.6 3年生：76.5 4年生：69.3 5年生：65.6 6年生：61.8 6年生：77.0 学校合計 445.9 <主体性に関するアンケート> 4段階評価の内、3以上の評価をした児童81.9%以上	103 92.9 104.5 99.8	B B B	○学期末テストにおいて、6学年中4学年が学期内に付けなければいけない基礎力を付けていることが分かる。しかし、既習の内容が定着しておらず、当該学年の内容を解くことに苦手を感じている児童もいることが課題である。実力テストのように問題数が増えたり視覚支援となる情報が減ったりすると、問題を正しく捉えることができなくなることも課題である。 ○主体性に関するアンケートでは、低・中学年は肯定的評価が80%を超えている。高学年は肯定的評価の平均が68.9%となっており、特に「算数の学習が好きか」「算数の学習に自信があるか」の項目について数値が低かった。児童の困り感や課題と感じている部分を適切に把握・共有し、算数科の「ほめとこころ」のみならず全体的にしっかりとほめることができていないことに課題がある。	○学校経営目標に対して数値等により適正に分析されており、課題の整理がなされている。 ○目標の設定次第で自己評価は変わる。学校としての積極性は理解できるが、数値に拘らずもう少し成果をアピールしても良いのではない。 ○学期末テストと実力テストの7月と1月の比較により3学年の伸びが見られる。3学年の取組の成果を学校全体としての財産にして欲しいと考える。 ○クラスの児童が20名以下になるとクラスの平均値に児童1人あたりの影響がとても大きくなるため、学年全体（クラス全体）よりも個別のデータの伸び率にスポットを当てても良いのではない。 ○学力調査が全学年平均より高いことはすごいことで有る。日頃の指導もそうであるが、子供が落ち蓄しているからできていると思う。 ○教育委員会は2年生がキーとなる学年であると捉えているが、2年生が若干気になる。また、国語については音読に取り組んで欲しい。	○引き続きほめる授業を徹底することで、児童が算数科に自信をもって学べる授業を目指す。また、個の力がどれだけ伸びたかも分かるように、学年全体を見る評価指標だけでなく、観点別達成値65%未満の児童を0%にするという評価指標を設定するなどとして、分析できるようにしていく。 ○児童同士の対話が生まれるような問いを意識することで、自分の考えを表現できる児童を増やし、表出できたことをしっかりとほめることで、対話のサイクルが生まれるようにしていく。 ○既習事項をきちんと身に付け、それを活用できるように基礎的な内容をやりきらせる部分と、対話を通して深める部分を単元を通して分析し、力が付くように授業改善を図る。 ○問題を正しく捉える力をつけるために、国語科で学年ごとに付けるべき力についても職員間で共有し、読む・聞く・話す・書く力の向上を図る。				
豊かな心と体の育成	対話を通じたコミュニケーション能力の育成	○「久保のこだわり」を実践する。 ※「久保のこだわり」とは、ていねいな言葉遣いについて指標に表したものである ○児童の実態に合わせて課題意識を喚起し「久保のこだわり」の価値や意味について考えさせ、指導を徹底する。 ・アンケートの実施 ・挨拶に対する自己評価とその理由の共有 ・挨拶見える化運動の掲示	○アンケートで肯定的な回答をした児童数÷全校児童数×100 ・肯定的な回答をした児童数÷全校児童数×100 ○理由の記述や行動観察から肯定的に評価できる児童の割合 ・肯定的評価の児童数÷全校児童数×100	アンケート自己評価結果：85 理由記述と行動観察：50	アンケート自己評価結果：78 理由記述と行動観察：55.5	アンケート自己評価結果：80 理由記述と行動観察：65.6	94 131	B B	○「久保のこだわり」アンケートによる児童の自己評価は、7つの質問に対する肯定的な回答は平均すると80%であった。言葉づかいやあいさつに関してはどの質問もほぼ90%以上の肯定的評価であったのに対し、中学生に対するあいさつに関する質問は肯定的評価が35%と他に比べて圧倒的に低かった。中学生との交流の機会やあいさつキャンペーンなどで中学校との距離を縮めてきたが、これからさらに取組を進める必要がある。 ○「久保のこだわり」に対する記述や行動を教員が見取り分析した結果、肯定的に評価できる児童は65%以上であった。ただ元氣よくあいさつをするだけでなく、その価値を感じながら行動していた児童が増えた。児童の記述には「あいさつの輪を広げていきたい」「大きな声であいさつをする」と、自分も相手も元氣になった。「人を見かけたら先手必勝であいさつをするようになった」「言葉づかいを使分けけることを意識するようになった」などの記述が見られた。	○学校経営目標に対して数値等により適正に分析されており、課題の整理がなされている。 ○目標の設定次第で自己評価は変わる。学校としての積極性は理解できるが、数値に拘らずもう少し成果をアピールしても良いのではない。 ○久保のこだわりに大変共感している。しかし、6年生の「自分にはいいところがある」が29.4%というはなぜなのか気になる。 ○丁寧な言葉遣いで校長が表彰を行っていることが子供達の意欲や励みになっていると思われる。このような取組が落ち蓄した学校生活につながり、いろいろな面で効果をあげていることにつながっている。	○「久保のこだわり」として取り組んできたあいさつ・返事・言葉遣いは落ち蓄した学校風土の醸成のため、継続して取り組む。学校として児童会を中心として児童発着での啓発活動が行えるよう働きかけ、児童自身がその意味や価値を語れるように、そしてそれがさらなる定着につながるようにしていく。 ○目標の設定を再考する。アンケート結果などの量的側面と、児童の具体的な行動や発言、記述などの質的な側面の両面から目標を設定する。例えば、アンケート結果では目標とする数値を、児童の行動や発言では、理想とする姿と児童の実態を比較して評価し、目標達成の指標とする。			
	自己の体力を伸ばす子供の育成	○新体力テストの結果から自らの課題を見いだし、課題克服に向けたトレーニングを行う。 ・新体力テストの結果から、本校の課題である「長座体前屈」「握力」「50m走」に絞り、その中から自分の課題が何かに気付く。 ・体育の授業開始時に、各自の課題克服のためのトレーニングを行う。 ※12月、課題種目に関する新体力テストを行い、成果を見取る。 ○運動好きの児童を増やすための授業を実践する。 ・体育授業において、主運動の時間を30分以上確保する。 ・運動に関するアンケートを実施する。	○第2回目の測定において、課題種目に関して、第1回目測定の数値から以下のパーセントアップ記録が伸びた児童の割合。 ・「長座体前屈」… 7% ・「握力」… 15% ・「50m走」… 5% ○アンケート「体を動かすことは好きだ。」	課題克服 80 アンケート 85	課題克服 2学期より実施 アンケート 86.3	課題克服 ・長座体前屈 35.3 ・握力 21.9 ・50m走 23.4 ・全体 25.0 アンケート 84.6	全体 32.4 課題克服 D アンケート B 99.5	○課題克服トレーニング ・「握力」については、2年生以上の学年では、87.5%の児童で記録が伸びていた。 ・4月の測定値を上回った児童は60%に達していた。しかし、各課題種目の目標値を達成できた児童は、25.9%に留まった。 ・トレーニングの実施期間が9月～12月と短かったこと、職員への周知が徹底しておらず、トレーニングへの理解が十分でなかったことが課題として考えられる。 ○アンケート・対象項目の結果について、ほぼ目標値を達成することができた。体育授業において、主運動の時間を十分に確保したことにより、目標に向かって充実した練習を行うことができた。また、「ほめる・認める」ことにより、児童の自己肯定感が高まったのではないかと考えられる。	○学校経営目標に対して数値等により適正に分析されており、課題の整理がなされている。 ○目標の設定次第で自己評価は変わる。学校としての積極性は理解できるが、数値に拘らずもう少し成果をアピールしても良いのではない。 ○くぼリンピック、なわとびなど、先生も一緒になって行っていることが良い。「体を動かすことが好き」と答えた児童の割合99.5%は他校に例を見ない数値であると思う。	○新体力テストの課題を克服するために、次年度の新体力テスト実施まで、「長座体前屈」「握力」「50m走」のパワーアップトレーニングを継続する。 ○課題設定した種目について、令和5年度と令和6年度の新体力テストの数値を比較し、トレーニングの検証を行うとともに、I P U環太平洋大学と連携し、トレーニングの見直しと改善を図る。 ○年度当初に、パワーアップトレーニングの方法について、実技を伴う研修を計画し、職員に周知徹底を行う。 ○「運動が好き」「運動が得意」と感じられる児童を増やすために、体育授業における主運動の時間を30分以上確保できるようにし、運動量を確保することにより、運動技能を身に付けさせ、できる喜びを味わわせる。 ○引き続きアンケートを実施し、状況を把握し改善に努める。				

久保中学校とともに

ともに学ぶ学校づくり	愛護を通じた達成感・自己肯定感の育成	・児童・生徒・教職員による「朝の（スマイルアクション）グリーンティン（SAG）」の実施 ・児童会と生徒会を中心とした小中学校の交流機会の設定。	中学生に（アクションをつけて笑顔で）愛護ができたことと実感できた児童	45	32.5	36.2	80	B	○中学生への挨拶については、7月よりも3.7ポイント上昇した。アンケートでは中学生と会わなかったと回答した児童が20.2%いる中で上昇したことは良い結果であると考え、特に小中合同の取組の機会が増えたことにより、児童と生徒の距離も縮まっていると考え、また、えいじゃんお披露目会や小中音楽コンクールお披露目会など、お互いに刺激を与える取組は効果的であった。また、小中合同運動会も一緒に行うことで、一緒に生活していることをより強く感じることができた。課題としては、中学校からのアプローチが殆どで、総学校からの提案が弱い。最後の1年間で、中学校との交流を小学校からも提案してい	○学校経営目標に対して数値等により適正に分析されており、課題の整理がなされている。 ○目標の設定次第で自己評価は変わる。学校としての積極性は理解できるが、数値に拘らずもう少し成果をアピールしても良いのではない。	○中学生への挨拶については、今後も継続していく。なかなか挨拶する場面が少ない状況であるが、小中の交流の場を増やし、児童生徒の人間関係を構築していきようしたい。具体的には児童会と生徒会など、子ども同士の交流が深まるような部分からかわりを持ち、行事などで交流が図れるようにする。 ○今年度実施した小中の交流を継続すると共に、日常的な交流の場として清掃活動を一定期間児童生徒と一緒に行うことができるような活動を仕組んでいく。
------------	--------------------	--	------------------------------------	----	------	------	----	---	--	--	--

【自己評価 評価】
A：100≦（目標達成）
C：60≦（もう少し）<80
B：80≦（ほぼ達成）<100
D：（できていない）<60

【外部評価】 イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。 ハ：わからない。